

令和2年度
入学試験問題

国語

2月3日 第1限

仁愛女子高等学校

一 次の記事を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

店で商品を購入するとき、金銭との交換が行われる。でも、バレンタインデーにチョコレートを贈るときには、その対価が支払われることはない。好きな人に思い切って、「これ受けとってください」とチョコレートを渡したとき、「え？いくらだったの？」と財布からお金をとり出されたりしたら、たいへんな屈辱になる。

① 贈り物をもらう側も、その場では対価を払わずに受けとることが求められる。このチョコレートに「渡す／受けとる」という行為は贈与であって、売買のような商品交換ではない。だから「経済」とは考えられない。

では、ホワイトデーにクッキーのお返しがあるとき、それは「交換」になるのだろうか。この行為も、ふつうは贈与への「返礼」として、商品交換から区別される。たとえばほとんど等価のものがやりとりされていても、それは売買とは違う。そう考えられている。

商品交換と贈与を区別しているものはなにか？

フランスの社会学者ピエール・ブルデュは、その区別をつくりだしているのは、モノのやりとりのあいだに差しはさまれた

I だとシテキした。

(A)、チョコレートをもらって、すぐに相手にクッキーを返したとしたら、これは等価なものを取引する経済的な「交換」となる。(B)、そのチョコレートの代金に相当するクッキーを一カ月後に渡したとしても、それは商品交換ではない。返礼という「贈与」の一部とみなされる。このとき、やりとりされるモノの「等価性」はフセられ、「交換」らしさが消える。

商品交換と贈与を分けているものは時間だけではない。お店でチョコレートを購入したあと、そのチョコレートに値札がついていたら、かならずその値札をはずすだろう。(C)、チョコレートに箱にリボンをつけたり、それらしい包装をしたりして、「贈り物らしさ」を演出するにちがいない。

店の棚にある値札のついたチョコレートは、それが客への「贈り物」でも、店内の「装飾品」でもなく、お金を払って購入すべき「商品」だと、誰も疑わ**ない**。でもだからこそ、その商品を購入して、贈り物として人に渡すときには、その「商品らしさ」をきれいにそぎ落として、「贈り物」に仕立てあげなければなら**ない**。

なぜ、そんなことが必要になるのか？

ひとつには、ほくらが「Ⅱ」／「経済」と「Ⅲ」／「非経済」をきちんと区別すべきだという「きまり」にとっても忠実だからだ。この区別をとおして、世界のリアリティの「端」が**かた**ちづくられているとさ**え**いえる。

(D)、それはチョコレートを購入することと、プレゼントとして贈ることが、なんらかの外的な表示（時間差、値札、リボン、包装）でしか区別できないことを示している。

たとえば、バレンタインの日にコンビニの袋に入った板チョコをレシートとともに渡されたとしたら、それがなにを意図しているのか、戸惑ってしまうだろう。でも同じチョコレートがきれいに包装されてリボンがつけられ、メッセージカードなんか添えられていたら、たとえ中身が同じ商品でも、まったく意味が変わってしまう。ほんの表面的な「印」の違いが、歴然とした差異を生む。

ほくらは同じチョコレートが人と人とのあいだでやりとりされる**こと**が、どこかで区別しがたい行為だと感じている。だから、^②わざわざ「商品らしさ」や「贈り物らしさ」を演出しているのだ。

ほくらは人とのモノのやりとりを、そのつど経済的な行為にしたり、経済とは関係のない行為にしたりしている。「経済化Ⅱ」
Ⅱ「らしくすること」は、「脱経済化Ⅱ」
Ⅲ「にすること」との対比のなかで実現する。こうやって日々、みんなが一緒になって「経済／非経済」を区別するという「きまり」を維持しているのだ。

（松村圭一郎『うしろめたさの人類学』による）

問一 二重傍線の部分ア「屈辱」・イ「シテキ」・ウ「フ」・エ「一端」の漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字で書け。

問二 傍線の部分①「贈り物をもらう側も、その場では対価を払わずに受けとることが求められる。」とあるが、その理由を文章の中の言葉を用いて二十五字以内で書け。(句読点を含む。)

問三 (A) (D) に入る最も適当なものの記号をそれぞれ書け。

ア たとえば イ そして ウ だから エ ところが オ さらに

問四 [I] に入る最も適当な言葉を文章の中から漢字二字で抜き出して書け。

問五 波線の部分 a ～ d 「ない」の中に一つだけ違う品詞がある。その記号を書け。

問六 [II] ・ [III] に入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものの記号を書け。

ア II 客 III 好きな人

イ II 対価 III 取引

ウ II 商品 III 贈り物

エ II 贈与 III 売買

問七 傍線の部分②「わざわざ『商品らしさ』や『贈り物らしさ』を演出しているのだ。」とあるが、

(1) 筆者が考えるA「商品らしさ」とB「贈り物らしさ」の演出を、それぞれ文章の中の言葉を用いて書け。

(2) 次のア～エの行為は、筆者が考えるA「商品らしさ」とB「贈り物らしさ」のどちらにあてはまるか。適当なものの記号をそれぞれ書け。

ア 旅行先で買ったお土産品に、メッセージカードをつけて渡す。

イ 趣味で描いた油絵を、その画像を添付してネットオークションに出す。

ウ 収穫した農作物を、ダンボールの箱に入れて市場に発送する。

エ 購入したタオルにのし紙をかけて、お返しにする。

問八 筆者が文章の中で述べていた課題は何か。最も適当なものの記号を書け。

ア なぜ、私たちはバレンタインデーにチョコレートを贈るのか。

イ なぜ、私たちは世界のリアリティを一部でもかたちづくるのか。

ウ なぜ、私たちはモノのやりとりをするのか。

エ なぜ、私たちは「経済／非経済」を区別するのか。

一一 次の記事を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

翌々日の午前、遅い朝食の食卓で、食後の果物の皮を剥いていた妻の菊枝が、

「ゆくゆくはグラフィック・デザイナーになりたいそうだけど……。」

と半ば独り言のように呟いた。

馬淵は読んでいた朝刊から顔を上げた。妻が誰のことをいったのか、咄嗟にはわからなかったが、デザイナーという言葉で会社のデザイン室にいると珠子がいつていた男友達のことを思い出した。

「グラフィック・デザイナーか。若い女の子が惹かれそうな職業だな。」

「どんな仕事をするんです？」

「こっちもくわしいことは知らないけど、写真とか絵とか図形とか、視覚に訴えるような出版物や印刷物の、デザインを考えるんじゃないのかな。」

「それで、美大で勉強したのね。」

「美大を出てるのか。」

「そうですって。」

「へえ。それは知らなかった。」

「あら、珠子からくわしく聞いたんじゃないんですか、枝村さんのことを。」

「枝村？ その男は枝村っていうのか。」

まあ、と妻は呆れたように彼を見て、珠子の男友達の名は枝村寛というのだと教えた。

「枝村寛か。白紙で会おうと思つて、なにも訊かずにおいたんだ。」

「でも、あなた、名前ぐらいは知つてあげないか。」

「そうか。枝村寛だな。会えば名乗るだろうが、まあ、憶えておこう。」

と彼はいった。

二、三日して、珠子が都合のいい日をいつてきた。今週の土曜日の午後二時に枝村を案内してくるといふ。その日まで、三日ほど間があった。妻は美容院へいつてきた。彼も、妻にうるさくいわれて理髪店へいつてきた。

「娘の男友達を、なにもお洒落して迎えることはないと思つがね。」

彼がぶつぶついうと、

「お洒落じゃなくて、ござつぱりするだけですよ。」と妻はいつた。「珠子だつて、むさくるしい父親だと思われたくないじゃありませんか。」

彼は、いかにも頭髪の手入れに不熱心であつたが、だからといつて自分がむさくるしいとは思つていなかった。

① 髪を刈つてもらつてきたばかり、というふうには見えないように刈つてね。」

と、彼は鏡の前の椅子に腰を下ろしてから、理髪店の主人に頼んだ。

② その日がきた。彼は、朝まだ暗いうちに目が醒めて、それきり眠れそうにもないので、起きてその日の仕事に取り掛かつた。仕事
が昼前に片付くと、あと、なにもすることがなかつた。昼食はいつもより軽く済ませた。

食後、こんなときに煙草が吸えたら、とか、飼犬のカポネが生きていたら、とか思いながら、家のなかをぶらついたあとで、縁側か
ら庭をナガめているうちに、沓脱石のかげにちいさな薄汚れた筧が置いてあるのに彼は気づいた。

彼は、その筧にまだいちども手を触れたことがないが、それがなにを入れる筧なのかは知つてゐる。庭木の肥料にする魚の骨を溜め

ておく筈である。魚の骨をよくカンソウ^ウさせてから細かく砕き、これを衰えの見える庭木の根元に埋めてやると、次の年には見違えるような勢いを取り戻し、前の年の倍ぐらいもの蓄^{つほみ}をつけるのである。

筈には、少量の骨がひろげてあった。彼は、ふと心が動き、台所の棚から小型の木槌^{きづち}を持つてくると、庭へ出て、飛び石の上で魚の骨を砕きはじめた。

間もなく、家のなかから足袋で畳を滑ってくる足音がして、頭の上から妻の声が降ってきた。

「あら、そんなところでなにをしてらっしゃるの？」

見ればわかることだから、彼は黙って縁側から見下ろしている妻の顔を仰いだ。

「どうして今日みたいな日に……。」と妻は目を大きくしていった。「大事なお客がある日に……。魚臭くなっちゃうでしょう？」

妻は、立ち上がった彼に子供の悪戯^{いたずら}を咎^{とが}めるようにそういったが、その顔は気を揉^もんでいるというよりもいささか薄気味悪そうだった。彼は木槌を妻に渡して、両手のおいを嗅^かいでみた。

「こんなにおいは石鹼^{せっけん}ですぐ落ちるよ。」

「でも、どうして突然こんなことをはじめたんです？」

それは、彼自身にもわからなかった。彼は口籠^{くちも}りながら洗面所へ手を洗いにいった。

珠子と男友達は、約束の時間きっかりに玄関のチャイムを鳴らした。馬淵が、呼びにきた妻と一緒に応接間へいくと、すこし間隔をおいてソファに並んでいた二人が一緒に立ち上がった。

「やあ、いらっしやい。」

と、馬淵^④はいつも仕事の客を迎えるときのように気さくにいった。

珠子が枝村を紹介し、馬淵は彼と初対面の挨拶をした。枝村は、中肉中背^{ちゅうにくちゅうせ}の、オダやかな顔をした清潔そうな青年であった。控え目な色の、こざっぱりとした身なりも悪くなかった。馬淵は内心ほっとした。珠子には似合いの相手に思われた。

「バイクが趣味だつてね。」

彼は、横長の卓子※1をはさんで枝村と向かい合う椅子に腰を下ろすと、すぐそういった。

「はあ……。」

と枝村は笑つて掌てのひらを額に当てた。

「こないだの信州はどうだった？」

ソファの二人は、ちらと目を見交わした。珠子はうつむき、枝村は顔を赤らめた。

馬淵は、もしかしたら彼が、お嬢さんじょうさんを私にください、などと紋切型※2のことをいい出して自分をいたたまれなくするかもしれないことを、おそれていた。それで、いきなりバイクの話などを持ち出して相手の口を封じたのである。

それからは、珠子もまじえて信州の風物が話題になった。馬淵は、八ヶ岳オの山麓ふもとに夏の仕事場を持っている。そこでの大自然に深々と包まれた暮らしの話に、枝村はすっかり魅了めいりょうされたようだった。

「そのうちに、みんなでおいでよ。」

と馬淵はいった。

妻は、仕事の電話が入っていると呼びにきた。しばらく席を外して、戻ろうとすると、珠子と枝村のほかに、思いがけなくも次女の志穂や三女の七重の声もしていた。四人は、なにやら楽しげに語り合っている。

馬淵は、若者たちの団欒だんらんの邪魔をせぬように、応接間のドアの前から引き返した。

「どうなさったの？」

台所でケーキを皿に切り分けていた妻が、怪訝けげんそうに彼を見た。

「応接間なら、紅茶もケーキも四人分必要だよ。」

「四人分、というと？」

「いつの間にか、志穂や七重も仲間に入ってるんだ。」

まあ、と妻はいった。彼は、窓辺へいって、すでに初夏を思わせる蒸れるような空気を吸いながら、肝腎なことにはなにも話さなかつたな、俺は、と思った。^⑥これでいいのだ、とも思った。

応接間では、さかんに若い笑い声が湧わいていた。

(三浦哲郎『燈火』による)

※1 「卓子」…テーブル。

※2 「紋切型」…決まったやり方。

問一 二重傍線の部分ア「訴」・イ「ナガ」・ウ「カンソウ」・エ「オダ」・オ「山麓」の漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字で書け。

問二 熟語の構成のしかたには次のようなものがある。波線の部分「写真」は次のどれにあたるか。適当なものの記号を書け。

ア 同じような意味の漢字を重ねたもの

イ 反対または対応の意味を表す字を重ねたもの

ウ 上の字が下の字を修飾しているもの

エ 下の字が上の字の目的や対象を示しているもの

問三 傍線の部分①「髪を刈ってもらってきたばかり、というふうには見えないように刈ってね。」と話したのはなぜか。その理由として最も適当なものの記号を書け。

ア 妻にうるさくいわれて理髪店へ来たのが悔しかったから。

イ 娘にむさくるしい父親だと思われなくなかったから。

ウ あらたまつて客を迎えているように見られなくなかったから。

エ いつも頭髮の手入れには熱心でこれ以上こざっぱりしなくていいと思ったから。

問四 傍線の部分②「その日があった。」とあるが、どんな日があったのか。文章中の言葉を用いて二十字以内で書け。

問五 傍線の部分③「その顔は気を揉んでいるというよりもいささか薄気味悪そうだった。」からは、「妻」のどのような心情がうかがえるか。次の中から**適当でないもの**の記号を一つ書け。

ア もうすぐ気を遣うお客が来るのに、全く家の掃除を手伝おうとしない夫への怒り。

イ 普段は策に手を触れることがないのに、今日に限って魚の骨を砕いている夫の行動への戸惑い。

ウ 夫を心配するというよりも、夫の考えが分からないもどかしさ。

エ 魚臭くなるのを咎めるというよりも、夫の時間の過ごし方への驚き。

問六 傍線の部分④「馬淵はいつも仕事の客を迎えるときのよう」にあるが、このような表現技法を何というか。適当なものの記号を書け。

ア 対句

イ 直喩

ウ 隠喩

エ 擬人法

問七 傍線の部分⑤「怪訝そうに」の意味として、最も適当なものの記号を書け。

ア 不思議がる様子で

イ 無愛想な様子で

ウ はつと驚く様子で

エ しょんぼりとした様子で

問八 傍線の部分⑥「これでいいのだ、とも思った。」とあるが、その理由を文章の中の言葉を用いて書け。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

『更級日記』、作者は菅原孝標女(すがわらたかすえのみすめ)である。いまから約一〇〇〇年前の一〇〇八年に生まれた平安後期の人物である。(中略)この物語の好きな少女は、十四歳のときに幸運なことにおばから源氏物語五十余巻と別の多くの物語を贈られる。待ちに待った 源氏物語である。(中略)

② はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、 一の巻よりして、人もまじらず几帳のうちにうちふして、
とびとびに読みかじって、(話の筋も)納得がいかずじれったく思う『源氏物語』を、一の巻から読み始めて、 横になつて、

引出でつつ見る心地、 後の位も何にかはせむ。 昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、 火を近くともして、

(箱から一卷ずつ)出して読む気持ちは、天皇の妻の地位も何になるう。 一日中、 目が覚めている間ずっと、 灯火を

これを見るよりほかの事なければ、 おのづからなどはそらに覚え浮ぶを、 いみじき事に思ふに、

この『源氏物語』を読む以外の事はしないので、自然と(その文章が)頭に浮かんでくるのを、 非常にすばらしいことと思つていたところ、

夢に、いとよげなる僧の黄なる袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」といふと見れど、 人にも語らず、習はむ

さつぱりと美しい僧で 「法華経の五巻を早く習いなさい。」と言つた、と見たけれど、

とも思ひかけず、物語の事をのみ心にしめて、「われはこのごろわろきぞかし、 さかりにならば、 かたちも限りなくよく、

思わず、 ただ物語のことだけを思いつめて、「今の私は(顔立ちも姿も)よくないことだ。(だが)年頃になったら、顔立ちもこのうえなくよく、

かみもいみじく長くなりなむ。 光の源氏の夕顔、 宇治の大将の浮舟の女ぎみのやうにこそあらめ」と

髪もすばらしく長く(美しく)なるにちがいない。光源氏に愛された夕顔や薫大将に愛された浮舟といった女性のようになるだろう。」と

思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

思つた考えは、今思うと本当で大変たわいもなく浅はかなものであった。

作者は仏教に深く帰依きえしたあとから、信心を忘れてこのような物語へと熱中していたことについて批判を書いているのだが、そのわりには物語に熱中している少女時代の記述には、作者が懐かしさを感じながら書いてるように思われる。十四歳、いまでいえば中学二年生である。当時、印刷術はなく、物語はすべて手書きで写すしかなかったから、当然作者が読んだのは写本であつたらうし、また冊子の形式ではなく巻物の形だつたらう。少女は巻物を紐解ひもときながら読んでいったことだろう。音読が基本であつただろうが、^③作者は黙読をしているようだ。音読から黙読への読書形態の変化は、読書の意味を大きく変えるものであつたといわれる。日本では明治初期まで音読が当たり前で、^④上野うえのにできた最初の図書館では声にだして読まないようにという注意書きがなされたほどだ。明治期まで、読書とは個人の営みではなく、誰かが朗読しまわりで複数の人がその物語を聞く集団的な営みであつた。そのことを知つてこの場面を読み直すと、ひとりで朝から晩までただただ源氏物語を読みふけり、夢に僧侶が出てきても関係なく、自分を物語の登場人物のように感じるすがたに、私はいつも感動を覚える。物語に沈潜することが少女の自己※4かたどを象りつつ、同時に物語という深い世界に開いてもいく。そしてこの読書好きの少女はついに書き手となる。(中略)菅原孝標女の回想は、父に連れられた関東での生活からはじまり、本好きの少女時代が描かれ、宮仕えとなり、やがて宮仕えをしりぞいて家庭に入り、女友だちとの友情が語られ、夫が亡くなり、最後の場面にいる。その場面を引いておこう。

さすがに、命はうきにも絶えず、ながらふめれど、後の世も、思ふにかなはずぞあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと

それでも、つらさにもくじけず、長続きするようだが、死後も、思うようにはならないだろうよと 気がかりだつたところ、あてにすることが

^④一つぞありけり。天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の家のつまの庭に阿弥陀仏あみだぶつ立ちたまへり。(中略) 仏、「さは、

一〇五五年

住んでいる

軒先の

立つていらつしやつた。(中略) 御仏が、「では、

この度は帰りに、のちに迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞えて、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば

あとで迎えに来よう。」とおっしゃった声は、私の耳にだけ聞こえて、

聞けなかつたと見て、

はつと目をさましたところ

十四日なり。この夢ばかり後の頼みとしけり。^⑤

十四日であった。この夢だけを 死後のあてにした。

『更級日記』のクライマックスというべきところだが、ここでは終わらずこのすぐあとに、誰もたずねてこない家でひとり寂しく暮らす心境について語られる。めずらしく甥※5おいが暗い夜にたずねてきたときにも、「月も出いでで闇にくれたる姨捨おはすてになにとて今宵こよいたづね来きつらむ（月の明るい夜ならともかく、月も出なくて闇にくれている姨捨山、夫に先立たれて悲嘆に沈んでいる年寄りのところに、どうして今夜あなたは訪ねてきたのでしょうか。）」という歌を詠んでしまったりする。救済はまだやっては来ない。それでもそれについて書くことのできる自分はまだ生きている。書く行為は、孤独な個人的行為のように思われるかもしれないが、書くことは必ず先行して書かれた他者の言葉と結びつく行為であるとともに、あとに連なる読者と結びつく行為である。きわめて社会的な行為であるといつてよい。こうして作者は老境の寂しさを書き記すことで、^⑥その寂しさは歴史的社会的な次元を獲得する。（後略）

（矢野智司『大人が子どもにおくりとどける40の物語』による）

※1 「几帳」…室内を仕切る家具。

※2 「袈裟」…僧衣を左肩から右腋わき下までおおう布。

※3 「帰依」…神仏など、すぐれた者に従って、すぐること。

※4 「象る」…形のない物事の内容を形に表すこと。

※5 「甥」…自分の兄弟姉妹の息子。この場合は、姉の死後、代わりに育てあげた姉の息子を指す。

問一 傍線の部分①「源氏物語」の作者として、適当なものの記号を書け。

ア 清少納言

イ 兼好法師

ウ 紫式部

エ 松尾芭蕉

オ 李白

問二 波線の部分 a 「おのづから」・ b 「習^なはむ」を現代仮名遣い（ひらがな）に直して書け。

問三 傍線の部分② 「はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏」とあるが、作者がおばから贈られるまで源氏物語をすべて手に入れられなかったのはなぜだと考えられるか。本文の現代文を参考にして四十字以上、五十字以内で書け。（句読点を含む。）

問四 傍線の部分③ 「作者は黙読をしているようだ。」とあるが、本文の古文から、その根拠となる部分を六字で抜き出して書け。

問五 傍線の部分④ 「一つぞありけり。」とあるが、この「ぞ」は係りの助詞で、「係り結び」となる。したがって、文末「けり」は、この「ぞ」によってどのように変化するか。ひらがな二字で書け。

問六 傍線の部分⑤「後の頼み」とあるが、誰が、どうしたことを「後の頼み」としたのか。最も適当なものの記号を書け。

ア 作者が、おばから贈られた『源氏物語』を何度も読み返したこと。

イ 黄色の袈裟を着たさっぱりと美しい僧侶が、法華経を教えてくれたこと。

ウ 身分の高い男性が、美しい女性に成長した作者を愛してくれたこと。

エ 阿弥陀仏が、作者の夢に現れて「あとで迎えに来よう。」と言ったこと。

問七 傍線の部分⑥「その寂しさは歴史的社会的な次元を獲得する。」とあるが、それは「書く行為」が何と結びつくことによって

獲得されるのか。本文の現代文から、二つ（十三字・八字）抜き出して書け。

